



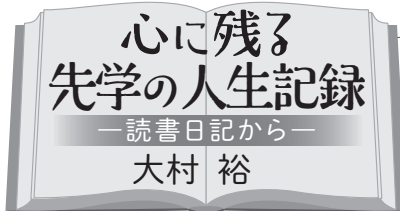
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.205  
2020.10.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第18回

## 窪寺紘一『東洋学事始—那珂通世とその時代』 (平凡社 2009年)

那珂通世(1851~1908年)は、考古学分野では「上古年代考」(1878年)を著し、「神武紀元」が年代的に大幅な水増しがなされていることを初めて主張したことで周知の学者である。私はかつて、エドワード・S・モースが大森貝塚報告において、「神武紀元」(当時から起算すれば2539年前)を無視し、「日本においては、(中略)書かれた歴史とは1500年前、あるいはおそらく2000年前までさかのぼり…」と記載したのは、日本人学者を通じて那珂の所見を知っていたからであろう、と推定したことがある(『日本先史考古学史講義』六一書房 2014年)。また那珂は、私のかつての勤務校(千葉県立千葉高等学校)の草創期における総理(校長)でもあったので、以前から関心を持っていた学者であった。

後述するように、那珂は大変な業績を残した学者であるにも拘わらず、東京帝大の教授になれなかった。それは彼が私学(慶応義塾)出身であること、「天皇制のタブー」を犯したこと(神武紀元批判)が原因であろうと、私は推測していたのであるが、本書を読んでそれが誤りであったことが分かった。もっと人間くさい「欠陥」があったことが原因であったらしいのである。このことを知り、ますますこの稀代の碩学に親近感を持った次第であった。

本書は、那珂の純粋な一代記ではなく、「内外の政治史・日本教育史・日本史学史(とくに東洋学史)から成る重層的歴史によって『明治』という時代を描きつつ、那珂通世の生涯を記すように努めた」ものであるが、ここでは、那珂の生涯と人物に絞って紹介することにする。

那珂通世は1851(嘉永4)年、盛岡藩士藤村源蔵政徳と妻弁子の三男として出生。9歳の時にその才能が盛岡藩校明義堂教授の江幡五郎通高(号は「梧楼」)の目に止まり、彼の養子となっている。その後、16歳の時に藩主の許可を得て正式に江幡氏に入籍。名を江幡小五郎通継と改名した。ついで1869(明治2)年2月、戊辰戦争に敗れた盛岡藩は「朝敵」となり、首謀者の一人と見做された養父江幡梧楼は、囚人であることを憚ってか藩主の命により姓を本来の「那珂」氏に復姓したという。さらにその年の6月、通継は名を「通世」と改め、「那珂通世」が誕生することになったのであった。

那珂は1872(明治5)年、時勢の赴くところを察して英学の習得を志し、慶応義塾に入塾する。しかし養父の梧楼が運塞中の身とあって、入学金はおろか毎月の月謝の納入にも事欠く有様であった。塾長の福沢諭吉は彼の経済的窮状を憐れんで、最初の一年間は彼を福沢家の住み込み書生として、その月謝納入を免除したという。那珂は福沢の恩顧に応じて出席率・成績ともに常に抜群であった。慶応義塾卒業後は、いくつかの学校の教師を歴任した後、福沢の推挙を受けて1877(明治10)年、千葉師範学校と千葉女子師範学校の教師長(教頭)となる。そして翌年、上記両師範学校校長並びに千葉中学校(現・県立千葉高校)総理を兼任することになったのであった。この時那珂は28歳の若さであった。ちな

みにこの時の千葉中には、教師に三宅米吉、生徒には白鳥庫吉がいた。白鳥の回想によると、英語の授業で三宅が「school」を「スチュール」と発音したところ、偶々参観していた那珂が聞きとがめ、「スチュールではないか」と注意したという(『日本民俗文化大系 9』講談社、1978年:49頁)。明治時代の語学学習の困難さを物語るエピソードである。それはともかく、冒頭に掲げた「上古年代考」を那珂が発表したのは、これらの職にあった頃のことである。私が思うに、官学アカデミーの中核にいなかったのも、このような思い切った発言が出来たのではなかろうか。

那珂は、これらの学校のトップとして斬新なアイデアを次々に実現させ、これが文部省に評価されて1879(明治12)年には東京女子師範学校の訓導(教諭)ならびに幹事(教頭)に補される。その後機構改革があり、1881年には校長兼教諭となっている。

那珂は有能ではあったが、相当な変わり者でもあったらしい。東京女子師範学校校長時代、体育の時間に洋風のダンスを採り入れたことを新聞社に叩かれると、激怒した彼は新聞社に乗り込み、記事を執筆した記者を呼び出して殴りつけたという(149頁:他の記述や巻末年表と照合すると所属校名や職掌に齟齬あり)。華族女学校教授時代は、同僚の北沢正誠と喧嘩して殴りつけ、同校を辞職している(1893年)。翌年東京高等師範学校教授となるが、同校における講義では、その日に学習する教本の範囲を示し、「何か質問があるか」と生徒に言って質問を待ち、何もなければ一言半句も言葉はなく講義を終わらせることもあったという。こうした癡症で狷介な性格が災いして帝国大学教授となれなかったと著者は推測する(東京帝大の講師になってはいる)。後年京都帝大教授となった教え子の桑原隲蔵は、〈先生が帝国大学の教授にも、帝国学士院の会員にもなれなかったことは、大学及び学士院にとっても大不幸といわねばならぬ〉と慨嘆しているが、東洋史の碩学桑原にここまで言わせた那珂通世の実力はいかなるものであったろうか。那珂の業績は多方面にわたっているが、「東洋史」に限定すれば、①『支那通史』、②『成吉思汗実録』が二大名著とされている。①は世界初の「中国」の通史であった。これは清国でも翻刻・出版されているが、この序文で羅振玉(著明な甲骨文字研究者)は、「このような立派な中国の歴史書が中国人の手によらず、日本人の手でなされたということに、われわれは大いに恥じ入る」というような文章を寄せている。②は『元朝秘史』全12巻の注釈付・訳書である。これを翻訳するために那珂はモンゴル語をマスターし、併せて広くモンゴルに関する史料を探究するためにドイツ語・ロシア語の学習にも余念がなかったという。本業の「中国史」の学習では、「九通」という全約2300巻の浩瀚な叢書を通読しているが、これらを「通読した学者は、わが国では古今先生の外恐らくは一人もあるまい」と桑原が断じている。まさに想像を絶する学問への精進といってよい。この過激な生活が、わずか58歳で急逝する原因となったのであった。

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録—読書日記から—(第18回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第198回) 山道 峻 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました(第15回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「特集 暮らしの中のタカラガイ」 忍澤成視 …4

## 考古学の履歴書

## カナダで米寿をむかえました(第15回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

## 15. 再び資料収集旅行

1974年の夏、夫フィリップのガンジダレ遺跡の第4次発掘調査に参加してイランからもどったのは9月初旬。新学期開始に備えて忙しい時期なのだが、この年は、講義の準備ではなく、荷解きをするのと同時に、次ぎの旅行のための荷作りをするようになった。というのは、マギル大学に就職してからすでに7年になるので、1974-75年度は7年に一度いただけるサバティカル、有給の研究休暇をイランに行く前に申請しておいたのが許可され、同時にカナダ・カウンセルに申請しておいた研究費も出るようになったので、この秋は10月15日から12月4日まで、日本へ資料収集旅行に出かけることにした。その目的は博士論文の内容をアップデートすること。『日本の前期旧石器文化の検討』と題する論文で学位をいただいたばかりだったが、すでに新しい遺物群や解釈が通報されているほか、書きながらも層位や遺物の性格について疑問のある点がいづつかあったので、論文の一部または全部を出版したいというお申し出に応じる前に、確かめたいと思っていた。

私の留守中はお手伝いさんに週2回、掃除や洗濯をしに来てもらうのはいつも通りだが、食事の準備に関してはフィリップは全くとお手上げなので、14歳の息子ダグラスの役目になった。手元に残っている当時の通信から見たところ、ダグラスは食事に関する責任者の役を結構楽しんでいらした。といっても私が出発前にシチュー、カレー、スープなどを多量に作り、一食分用の容器に入れて、冷凍庫に詰め込んできたので、それを解凍して食卓に出すのが主な仕事だったとおもうが、ときには「今夜はローストビーフだ」などという文面がある。本当に生肉をオーブンに入れて焼いたのか、すでに料理してあるものを買ってきたのかは不明。

一方、私は日本時間の16日の夜に到着してから45日間、北海道から九州の宮崎まで、新幹線、在来線、飛行機、バスで駆け回っていた。まず東京で一晩すごしてから堺市にあった父の家に移り、そこを本拠にして、各地の研究者の方々に連絡をとって旅程を整備した後、京都に出て、平安博物館所蔵の丹生遺跡の資料の一部を計測させていただいたり、角田文衛博士から本遺跡に関する最近のご意見をうかがったりした。数日後に千葉県茂原市の妹宅に移って、外房線で東京に通い、明治大学、立教大学、東大、ICU所蔵の資料を見せていただいた。芹沢長介、杉原壮介、相沢忠洋、鈴木正男の諸氏のお世話になり、小林達雄氏宅では小田静夫、チャールズ・キーリー両氏や学生たちと賑やかに会談した。

29日以降は数日間、東北大学にある遺物をじっくり観察させていただくつもりだったので東北本線で仙台にでかけた。芹沢長介氏が授業を終えられるのを待って計画をお話したら、実はフランスからこられたアンリ・ド・リュムレー(Henry de Lumley)氏に翌日東京で会うことになっているので、一緒に行ってくれないかとのこと。東北新幹線が開通する前だから、長時間かかって仙台に着いたところなので、ややがっかりしたけれども、芹沢さんのお申し出をお断りすることもできず、翌日同行させていただくことになった。その夜は仙台の芹沢宅に泊めていただき、翌日は蒲田の芹沢邸にお泊り下さいといってください。東京への帰路の車内では芹沢さんとのお話がはずみ、昨日とちがって、疲れも感じず、非常に有益な時間を過ごすさせていただいた。ド・リュムレーはヨーロッパ最古級の原人化石を出土したアラゴ洞窟などの発掘で有名な考古学者。30日の夕刻、シャブシャブの夕食を共にしたというメモがのこっているが、どのような話題が出たのかについては記憶がない。

11月3日に再び仙台に来て、草水台出土の石器、剥片、石核に

ついて属性分析を適用する準備にとりかかった。これには計測を手伝ってもらう人が必要なので、だれかを推薦して下さるよう芹沢さんをお願いしてあった。これに応じて来てくれたのが、後に奈良文化財研究所の埋蔵文化財センターに所属して環境考古学、特に動物考古学で成果をあげられた、松井章氏。当時東北大学の学部生だった松井さんは、私がどんなことをしているのか知りたかったので、お手伝いさせていただくことにしたといっていた。当時のことで当然ながら、ニューアークオロジーにも大変関心をお持ちだったようだ。芹沢さんからのご依頼で、北米考古学の動向などについて学生向きの講演をした際に、ルイス・ビンフォードが「人類学としての考古学」(Archaeology as Anthropology, 1962)で、「何が起きたか」(“What happened”)だけでなく、“Why” “なぜ” “How?” “どのようにして” “起きたのか”を探求すべきだといっていることを紹介したのに非常に感銘されたと何年か後にいってください。

石器の計測を松井さんをお願いしておいて、私は11月9-10日に考古学協会の1974年度大会が開催される名古屋に行った。名古屋滞在中は紅村弘氏ご夫妻に大変お世話になって、加生沢出土の遺物を調べさせていただいたり、多治見遺跡へ連れていっていただいたりした。再び仙台にもどって遺物の計測、撮影に数日過ごしたのち、16日は芹沢さんのご案内で山形まで日帰り旅行。加藤稔氏が発掘・蒐集された、上屋地、明神山、庚申山出土の遺物を見せていただいた。

11月18日には、向山、大久保、星野、福井15層、岩宿0など多数の遺物を勉強させていただいた仙台にサヨナラをして札幌に向かった。フォード大統領が来日中だったので飛行場での検察が厳しくてモタモタしたが、無事に札幌着。札幌に来た主な理由は前年の1972年に発見され、2万年以上のC<sup>14</sup>年代の出ている祝梅三角山の資料を実見することで、調査担当者は吉崎昌一氏なのだけれど、実際には岡田宏明氏に札幌滞在中大変お世話になった。

翌19日に札幌をたって東京周辺と大阪付近でそれぞれ数日間過ごしてから24日に米子に飛んだ。山口大学の小野忠熙博士が米子空港まで来てくださって、宍道湖付近の遺跡をご案内いただき、続いて山口市周辺の遺跡へも連れていってください。山口から27日にバスで福岡に出て大宰府博物館、佐賀大学を尋ねたあと、草水台の資料を見せていただくために別府に向かう。その目的は果たせなかったが、賀川光夫先生が草水台遺跡に連れて行って下さったので、ミカン畑になっている遺跡周辺の景観を経験することができた。29日の夜遅くに別府から宮崎に着き、翌日は南九州短期大学で出羽洞窟出土の遺物を見せて頂いた。12月1日に堺の家にもどって帰宅の準備をしながら、日本列島駆け回り旅行の最終日に鳥打峠遺跡で蒐集された遺物を見せていただくために新幹線ヒカリ号で岡山まででかけるなどしたが、12月4日に無事帰国。フィリップとダグラスに歓声で迎えてもらった。

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学部研究科(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学部に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学院人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学院人類学科 非常勤講師
1970-2003年	マギル大学人文学院人類学科 専任教員;2009年以来名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。今回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。



## Jレーエッセイ

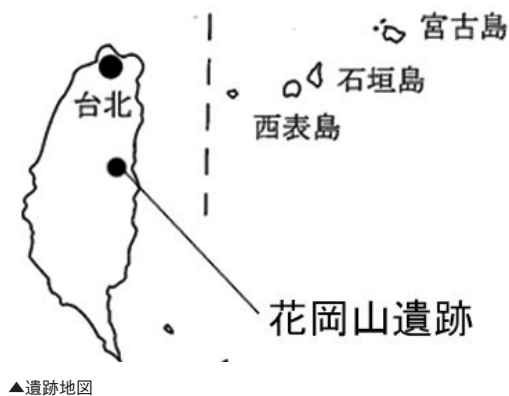
## マイ・フェイバレット・サイト 198

## 花岡山遺跡 ～台湾・花蓮県

山道 峻

私が紹介する遺跡は、台湾の花蓮県に所在する花岡山遺跡である。花岡山遺跡は日本統治時代、当時の開発工事に伴って確認された遺跡である。1929年、台北帝国大学（現国立臺灣大学）の移川子之助と宮本延人らが発掘調査を開始した。この移川・宮本による調査に始まり、現在に至るまで開発工事のたびに発掘調査が実施され、大量の遺物と甕棺が出土した。台湾東部において相当な広がりを持つことが判明し「花岡山文化」として設定された。「花岡山文化」の特徴は同時期の周辺地域では石棺墓や土壇墓とする中で、甕棺を使用することである。この広がりには現生原住民族であるアミ（阿美）族の居住域と重複する部分が多いことから、後の時代に続く「花岡山上層文化類型（鉄器時代）」も含めてアミ族の祖先にあたる人々がこの遺跡を残したのではないかとされている。

私は学部生のころに台湾大学へ1年間留学しており、その際に花蓮県から台湾大学へ委託された花岡山遺跡の範囲内に所在する老人会館建て替え工事に伴う緊急発掘調査業務へ参加した。



▲遺跡地図

発掘調査時は5つの甕棺、多数の土器と石器、鉄器が8点、土偶が1点、ガラス玉が304点出土した。土器と石器の特徴や組成、甕棺については先に述べた「花岡山文化」の特徴を備えている。この文化の特徴は紙幅の都合から省略する。土器は罐を量的に主として鉢や瓶、わずかに豆（高坏）がある。土偶は乳房が表現されており、女性型である。上半身は肩が残っており、上腕から先は欠損している。下半身はへそ下の太ももや腰下の尻に向けて膨らむだろう部位で欠損している。目鼻耳はない。石器は打製石斧を量的に主として磨製石斧もあり、石鏃や砥石、鑿、わずかに石刀（石包丁）がある。また、挟りをいれた漁網錘と想定される丸石も多数出土した。玉製の環の一部やガラス玉も出土しており、ガラス玉は出土状況からみて甕棺に副葬されたものである。また、多数の焼石や集石遺構が調査区の広範囲に広がる状況で検出されており、魚骨などの食糧残滓が焼石直上で確認されたことから、石蒸し調理法などが行われていたと考えられている。

過去の調査では錬鉄に使われたと推測された坩堝らしき破片が出土しており、台湾東部鉄器時代の「花岡山上層文化類型」の人々は製鉄技術を持っていた可能性があると指摘されたが、製品が出土しなかったため推測にとどまっていた。しかし、今回の調

査ではほぼ完形のサイズのには大型な鉄鏃1点が出土したことから、当時の花岡山遺跡の鉄器時代の人々は確実に鉄器を使用していたことが明らかとなった。ただし、台湾北部の十三行遺跡のように明確な製鉄遺構が確認されてはいないため、製鉄についてはまだ推測にとどまっている。

台湾では編年研究が十分に蓄積されている状況とは言い難く、年代観は炭素14年代測定等の科学分析を根拠としている。この調査でも炭素14年代測定によって年代を計測しており、花岡山文化層から採取した試料は4500B.P.の年代を示し、花岡山上層文化類型層の試料では1600-2000B.P.を示した。

以上、報告書から参加した調査の成果をまとめたが、私がこの遺跡を紹介したいと思ったのは、報告書ではほぼ触れられていない日本統治時代の遺物である。いわゆる近現代考古学の対象となる範囲であるだろう。調査では日本の戦前の古銭が多数出土した。出土したのは、桐一銭銅貨（昭和9年）やカラス一銭アルミ貨（昭和14年）、五銭アルミ貨（昭和16年）などである。先に個人的な発掘当時の思い出を語らせていただきたい。現場の作業員たちはほとんどがアミ族で、日本統治時代を経験した人たちの孫やひ孫世代であった。その中に日本人留学生が仕事に参加してきたのだから、彼らは祖父母から習ったという片言の日本語で熱心に話しかけてきた。また、休日は彼らの豊年祭に招待され、家々を訪れては日本統治時代を幼年期に経験した高齢のご老人方が流暢な日本語で当時の思い出を話してくれた。

これらは遺跡とは直接的に関係はない話だったが、発掘中に出土した戦前の古銭をみると同時に古老たちの話や、花岡山遺跡の所在する花蓮周辺にかつて日本人たちが生活した痕跡として残っている遺跡が、台湾近代に日本の統治があったことを、まざまざと思い知らされた。

行政に入ってから調査は偶然か、明治大正期の遺構や沖縄戦の戦争遺跡を取り扱う機会がたびたびあった。現在も戦争遺跡の調査中であり、学生の頃に花岡山遺跡の調査をしたことは、改めて考えると私の貴重な経験となっていると思ったので、紹介させていただいた。

参考文献：  
花蓮縣文化局2017「花岡山老人會興建工程搶救發掘計畫成果報告」



▲甕棺（残存高約60cm）

▲土偶

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは横手伸太郎さんです。

## 考古学者の書棚

# 「特集 暮らしの中のタカラガイー先史時代から現代まで」民具マンスリー第51巻6・7号合併号

神奈川大学日本常民文化研究所 木下尚子 編(2018) 忍澤 成視

## 1 タカラガイ特集

タカラガイ・宝貝は、世界各地で有史以前から人と関わりをもち、特別な扱いがなされてきた海洋生物の一つである。「貝貨」と呼ばれる古代貨幣の材料に使われ、漢字の「貝」もこの貝の姿と文様を形象文字にしたものだとされている。貝類は軟体動物に分類されるが、その中でタカラガイのなかまは、サザエやアワビと同じ巻貝の範疇に入る。しかしその形態は螺旋状を呈さず、およそ巻貝のイメージができない。最大の特徴は背面部に見られる色とりどりの文様と光沢、そして腹面部にある左右を分かつ鋸歯状の殻口部である。これら他の貝類とは著しく異なる貝殻の特徴こそが、日本を含め世界各地の人びとを、先史時代から現代に至るまで魅了している理由だ。

そして、この「文化」と呼ぶほど世界に広がる人とタカラガイの関わり方の深さを知るため、民俗学系の研究誌である「民具マンスリー」で、期せずして集まった研究分野も地域も異なる研究者たち。編者の木下尚子、黒住耐二の言によれば、わが国初の貝をめぐる自然科学と人文科学、生物学・考古学・民俗学のコラボレーションが実現した。以下、5本の研究論文の概要を紹介する。

## 2 縄文時代のタカラガイ加工品(忍澤成視)

縄文人のタカラガイに対する扱いは、世界に類を見ない独特なものだ。加工の仕方には二種類あり、一つはタカラガイの美しさの象徴である背面部を切り取ってしまうもの、そしてもう一つは、さらに鋸歯状の溝で分断される腹面部を内唇・外唇に分割してしまうものである。用途は前者がペンダント、後者は幼児の埋葬に伴う出土事例や、同一個体とみられる製品が数キロ離れた同時期遺跡から発見された事例を根拠に、安産への護符、ムラ同士の結束力高揚を意図した、分割所有アイテムとみなされている。タカラガイは、世界的に見れば、熱帯や亜熱帯地域に多く生息し、日本における分布域は、列島を回遊する暖流の影響下にある海域のみであり、その北限が凡そ房総半島、能登半島にある。したがってタカラガイは、黒曜石やヒスイなど産地が限定される石材と同様に希少品扱いされた「貝材」で、製品は山間部から北方域まで全国各地に流通した。縄文のタカラガイ加工最大の特徴は、現代人に最も魅力的な美しい文様のある背面部を捨て去る点にあり、彼らの関心が「腹面部の形状」に注がれていることがわかる。女性器に似たその形状を理由に、子孫繁栄の象徴としての扱いが生まれたとみる。本編では、東日本の縄文人がタカラガイを珍重していた実態に迫る。

## 3 タカラガイの利用(黒住耐二)

生物学者(貝類学)である筆者は、本特集の冒頭、生物学的にタカラガイを論じた後、本編で近現代の土産品を通じた普遍的な価値と利用状況を紹介する。一つは遊具としての利用で、比較的サイズや殻質が同一なことを理由に、おはじきやゲームの駒として利用した例が、沖縄やチベットで知られているという。もう一つは、土産品としての利用である。これは、タカラ

ガイの貝殻表面の模様や光沢の美しさ、殻質の重厚さ、そして入手の容易さから、加工次第で様々な土産品に加工可能なことによる。ペンダント、容器周囲のビーズ装飾、仮面、人形細工、ランプとしてのカメオなど、大小様々な種類のタカラガイが用途に応じて利用されている。南洋地域では、島特有の貝の加工品を、観光客から外貨を稼ぐ手段としている。最後に生物学者ならではの視点、軟体部が食用となるかに触れ、殻質が比較的丈夫で厚いため、生身は少なく取り出しにくいものの、食用にならない訳でなく、島の珍味として日本の島嶼部では利用されていることも紹介している。

## 4 子安貝の誕生(木下尚子)

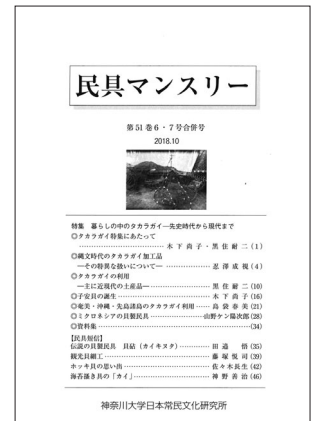
タカラガイは別名「子安貝」と呼ばれている。お産の時、この貝を握って臨めば、無事安産の願いが叶うとの言い伝えに由来する呼び名とみられる。また、「竹取物語」で姫が求婚者あてに出した注文品の一つに「燕の子安貝」があることから、古来より希少品扱いされていたことがわかる。当時の人びとは、子安貝が燕の出産時に卵とともに産み落とされると信じていた。本編では、この子安貝とタカラガイが同一の貝であるかどうかに関心を当て、蔵骨器内で焼けた人骨とともに出土したタカラガイ、また仏像の胎内で見つかったタカラガイなど、平安時代の事例を紹介し、女性と出産の象徴的物品としての扱い、貝殻が本州の海岸打ち上げ物として調達されたことなどにも言及している。

## 5 奄美・沖縄・先島諸島のタカラガイ利用(島袋春美)

本土域でタカラガイが珍重される一方、この貝の本場である島嶼域では、道具の材料である石材の乏しさを補うため、タカラガイが積極的にその素材に利用されている。漁網の錘としての貝錘はこの好例で、大型のタカラガイの筆頭であるホシダカラなどが大量に使われている。貝殻背面を打ち割り、網の端に結び付けて使われた。また装飾品としては、本土ほどではないものの、サメの歯やイヌの歯のペンダントを模造するための材料に使われる。本編では、こういった琉球列島での使用状況を紹介する。

## 6 ミクロネシアの貝製民具(山野ケン陽次郎)

最後に、タカラガイの本場であるミクロネシアの使用状況を紹介。この地域では、琉球列島以上に石材に代わる貝の利用がある。加工具、漁労具、調理具・食器、装身具・財貨として、斧・鑿、釣針、容器、ビーズなど大小様々な貝種が、それぞれの貝殻の特性を活かし利用されている。海洋の島に住む人々にとって、貝がいかに強く日常生活に結びついてきたかがよくわかる。所変われば品変わる。



## アルカ通信 No.205

発行日 2020年10月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : <http://www.aruka.co.jp>